

公益財団法人庭野平和財団
平成 26 年度助成活動助成最終報告書

1. 実施団体の概要：

- 1) 名 称：特定非営利活動法人 アジアの子どもたちの就学を支援する会
- 2) 代表者：長谷川 安年
- 3) 住 所：197-0825 東京都あきる野市雨間 429
- 4) 電 話：042-558-0218（多摩川幼稚園内）
- 5) 事業実施期間：平成 26 年 11 月 1 日～平成 27 年 11 月 1 日

2. 活動の名称：

カンボジアと日本の母親の助け合い「Mother to Mother」活動の自立と安定のための作業場整備と運営体制強化事業

3. 活動の目的：

当会は、任意団体として活動を始めた 2006 年より、カンボジアの困窮する地域に対して、教育機関の運営支援、就学支援及び就学するものの家族の経済自立のための支援、及びそれらの事業を円滑に推進するための広報、啓発、調査、連絡調整に係る事業を行うことにより就学率の向上を図り、もって地域の発展に寄与すること目的として活動を続けて来た。

主な活動内容としては、学校校舎の寄贈、及び寄贈後継続して子ども達の就学を支援する為に、・校舎建設・設備建設（井戸、遊具など）・金銭援助（教員への助成金支給）・物質援助（教材、文具、制服など）・自立支援（Mother to Mother 活動）・交流（スタディツアー）・国内活動等であります。現地事務局や現地スタッフは置かず、現地協力者及び年 2 回の現地訪問を実施することにより成果をあげることができている。

中でも、最貧困家庭の未就学児童解消への強力な解決手段として、貧困家庭の現金収入の道を模索してきた中で、カンボジアの母が日本の母に代わって布小物を製作し、カンボジアの母は現金を、日本の母は布小物を、つまりお互いが困っている事を助け合う事で双方の問題を解決するという「Mother to Mother」を考案し、2009 年から活動を開始した。2014 年時点での販売協力園は約 40 園、年間販売額は 180 万円、27 世帯に年約 50 万円の仕事を提供できており、その結果未就学児童がゼロに、中退者が減少した。

順調に進んできている活動ではあるが、より一層の活動の拡大と自立の為に、現在作業場となっている校長自宅に代わる活動拠点となる作業所の建築の必要性が生じた。

今回の『作業場建築と運営強化事業』活動の目的は、専用の作業所を整えることで、現在日本で行っている作業を現地に委託し、生産数を増やし持続可能な事業として軌道に乗せ、より多くの最貧困家庭の母親に仕事を提供し、未学と中退問題の解決を目指すことである。

更には、この活動を通じて両国の母親間での相互理解が進み、母親世代だけでなく子世代に平和をつなぐことを目的としている。

4. 活動の内容と方法:

活動の目的達成に向けての内容と方法は以下の内容を計画した。

1) 作業場の建設

- ① 建築を目的とした土地を購入（前年度に購入済み）
- ② 土地の造成
- ③ 建物建築着工

2) 作業所完成後の整備

- ① 効率的かつ衛生的な布を切る為の大きな作業台を整備する（現在は床で行っている）
- ② 布、完成、型紙などを埃から守り、安全に保管できる場所を整備する
- ③ 日本での作業を委託する為にミシンを購入
- ④ ミシン技術の訓練
- ⑤ 上記を適切に実施するために作業場完成時に日本からスタッフを派遣する

3) 運営体制を整える

- ① 常時作業場を管理できる人材を育成し配置する
- ② 日本でボランティアが行っている作業を受託できる人材を育成し配置する
- ③ 作業所が完成することでより必要性が高まる日本との連絡役を育成し配置する
- ④ 人材を適切に配置できるように作業場完成時に日本からスタッフを派遣する
- ⑤ 足踏みミシンを台購入し、現在日本で行っている作業ができる人材を育成し配置する

5. 活動の実施経過:

実際に実施された事業内容は以下の通りである

- 1) 2013年9月～ 誰も英語も話せない環境で会話は常に通訳を通して行ってきたが、今後の活動安定にどうしても直接日本語で最低限の連絡が取れる体制を整えることが必須であった。その為、村に最低限の日本語での伝達が可能レベルの人材育成をめざし、日本語教師を週2日間村に派遣し、教師6人を対象に、一年間の日本語教育を開始した。尚、人選においては、カンボジアでは結婚時に男性が女性の家に入ることが多い為、引っ越し可能性の低い女性教師を対象とした。
- 2) 2014年1月 支援校の隣接校が購入可能と知り、作業場建築を念頭にその土地を取得した。学校隣接地という事は、将来活動が安定した時、あるいは、活動の役目を終えた時に、学校に土地及び建物を寄付できるという大きな利点があると考えた。
- 3) 2014年9月～ 作業場完成後に作業場を管理できる人材と、日本との連絡役の育成を目的として、日本語及びMother to Mother活動研修の為に教師2名を日本への招聘を実施した。招聘期間は11月までの3か月間であり、日本語の研修・幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、児童福祉施

2)作業場完成後の評価

Mother to Mother 活動で縫われている布小物は、日本で販売されるものである。使うのは主に子どもであるため、その品質管理と衛生的な取り扱いは必須である。完成した作業所は、床は汚れが目立つ「白」にしたため、常に埃を取らなければならない。完成後作業の様子を観察していると、担当者が一日に何度もほうきをかけている。大変なことではあるが、これこそが求められる環境であった。

作業場には、大きな収納棚が整備され、布や製品を、整理して保管することが出来るようになった。今までの校長宅では保管場所が限られ、非常に大変な思いをしていたが、とても管理がしやすくなったと喜ばれている。今後更に生産量が増えたとしても十分なスペースが確保でき、又、安全に保管されることによる安心は大きい。

手縫いが基本である Mother to Mother 活動であるが、どうしてもミシンでの仕上げが必要の箇所もあり、その部分は日本において行われていたが、生産量が多くなるに従ってその日本でのミシン作業の負担が大きくなっていった。今以上の増産にはカンボジアへのミシン作業の移行は必須であったが作業環境やスペースが問題となっていた。今回新しくスペースができた為、新たにミシンを購入し、技術訓練を始めることができた。この作業所完成に伴うミシンの設置は、今後の活動の発展に向けて大きな一歩となる。

3)運営体制を整える活動(日本語習得及び作業所管理者育成)についての評価

作業場完成を念頭に置き、2013年より始めていた日本語習得事業【支援校教師6名への日本語学習計画】においては、週二回の授業を一年間実施したが、ひらがなや文法を学んでも実際の会話ができるまでの成果は得られなかった。

しかし、丁度当団体の事務所のある建物に隣接する空き家を住まいとして提供できる環境が整った事もあり、最低の基礎は学べたと判断し、校長1名及び、語学能力の優れていた教員1名を日本へ招聘する計画をすすめた。ビザ発行までの手続きに非常に手間と時間がかかり一時は断念と思われたが、ぎりぎり発行され無事実施することが出来た。

日本滞在中は、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、児童福祉施設などで見学や研修や、水族館や動物園など、カンボジアにはない施設などを見学し、多くの教諭としての見聞を広げてもらう事ができた。また、早朝から夜まで、日本語の授業を実施し、わずか3か月の滞在ではあったが、必要最低限の日本語能力を身に付けて帰国することが出来た。

帰国後、その成果はすぐに発揮され、ひらがなのメール及び電話での連絡事項を直接できるようになった。これは、今までどんな小さなことも通訳を介さないとできなかったのに比べると、飛躍的に効率的になったといえる。

また、今回の招聘プロジェクトにより、日本の生活の様子や、教育現場を校長はじめ教員が直接視察できたことは百聞に一见にしかずで、その意義はとても大きかった。必要性をいくら伝えてもなかなか取り入れてもらえなかった下駄箱やすのこが帰国後すぐに整備されたのには驚いた。

また、帰国後覚えた日本語を忘れないためにも、また、一年間日本語の勉強を一緒

設などの教育機関の視察や、教師の能力向上の為の研修等を実施した。

- 4) 2015年1月 ★庭野財団より助成決定
現地を訪問し、土地整備に着手。土地整備は、現地への経済効果を期待し、現地の人々へ土木工事を委託した
- 5) 2015年2月 建物工事着工
現地土木会社 KHJに工事を委託し、随時工事の進行状況について報告を受け、必要な場合は改善を求めながら工事を進行した。
- 6) 2015年5月 現地訪問視察 建築の進行確認と、完成後の整備についての打ち合わせ及び、完成後必要となる備品の購入手続きを行った。
- 7) 2015年6月 作業所完成
- 8) 2015年8月 現地視察訪問。落成式実施。
作業所の設備整備及び研修を実施。本格的な利用が始まった

6. 活動の評価:

活動の評価は次のものである

1) 作業場建築プロジェクトの評価

作業建築プロジェクトにおいては、①土地の造成 ②建物建築の2段階に分けられる。

①土地造成

貴財団より助成を受けた土地造成部分に関しては、助成決定後直ちに造成工事に着工した。この工事に関しては、工事を土木会社ではなく、村人たちによって工事を委託した。村人に仕事を依頼することで、支払いを村人に行う事ができ、村の経済に寄与することが出来ると考えたからである。

②建物建築

土地造成が完了後建物の工事に着手した。建築は今迄にも学校建築を依頼し確かな信頼を置いている KHJ に依頼したが、時折報告を受けながらほぼこちらの希望通りの建物を完成することが出来た。

一番の問題となったのは、建物内に井戸をつくるかトイレを作るかの選択が必要になった時である。現地では外にトイレあるのが普通であるが、外にあるという事で、きれいな状態で管理されているとは言い難いところが多い。そこで、作業所では室内にトイレを作り、きれいに保つことへの意識を高めてもらう事にした。トイレをつくることで井戸は外になるが、水をポリタンクで室内に常備することで、作業時には必ず手を洗う事を徹底してもらう事にした。作業にあたる母親からこういった衛生教育が各家庭に入っていく事を期待している。

この件に関しても、日本滞在中で衛生教育の実施状態を視察してもらった成果が出ており、完成後に訪問した時には、トイレは水場に石鹸とタオルが整備されていた。

これは、カンボジアの他の村ではあまり見られない風景であり、まさしく視察研修の成果であり、今後の影響が楽しみでもある

にしてきたが日本への訪問がかなわなかった仲間の教諭のためにも、現地で日本語教室を開いてもらっている。非常に熱心に授業を行っているが、本人自身がまだまだ初歩段階であるため、その内容は十分とは言えない。今後どうサポートしていくかが、課題となっている。しかし、

3 か月間一緒に生活した中で生まれた信頼関係のもつ意義は大きい。今後の支援活動に大きく影響してくるであろうと考えると、大成功のプロジェクトであったといえる

7・今後の課題：

今後の大きな課題は、以下の内容である

- 1) Mother to Mother 活動において、実際にミシン作業に入ってみると、技術のレベルを日本で受け入れられるまでに向上させるのは非常に難しいと感じている。何度伝えても「平行」にきれいに縫う事が出来ない。日本の学校では平行や直角を細かく習うが、こういったことが日常の仕事に大きく影響していることを痛感する。ミシンの作業をいかに徹底して日本で受け入れられるレベルまでに育てるか、それが今後の大きな課題となっている。
- 2) Mother to Mother 活動において、カンボジア国内でのミシン技術の向上を図ると共に、作業の効率化、縫製技術を安定させ、いかに現在日本国内で行なっている作業をカンボジアに委託していくかが今後の課題である。それには、カンボジアに数か月程度長期滞在できる人材を探し技術指導に当たってもらうのが一番の近道ではあるが、一番難しいことでもある。しかし、今以上の生産量を図り、Mother to Mother 活動の自立を図るためには、カンボジアに委託できる作業を増やしていくことを避けては通れない。希望者を募るが、長期滞在が無理な場合は、1~2 週間程度の滞在を繰り返し指導にあたるほかはないと考えている。この課題を解決することは、カンボジアでの生産量、仕事量がふえることでもあり、それは貧困家庭の子どもの就学への道を更に開くことにつながるためあきらめず、根気よく課題に取り組んでいきたい。
- 3) 現地では外国語が話せることは、仕事に付き賃金を得ることができる道に繋がる。今回のプロジェクトで最低限の日本語を習得した教師の能力をいかに維持、向上させ、現在行っている日本語の授業を継続し質を高めることが今後の課題となる。
- 4) 現地作業所が完成したことにより、当団体の抱える責任は一層増した事をつうかんする・Mother to Mother 活動を含め、10年後の活動のあり方をしっかりと定め、活動にかかわるスタッフ一同がその目標を共通に認識する必要がある。また、当団体への信頼性を高め、より支援活動を円滑に行う為にも認定を取ることでも今後の課題となっている。

以上。

活動の写真



完成した「作業場」



作業場の内部。窓には鉄格子、ドアには鍵が整備され、布を安全かつ衛生的に管理できるようになった。



製品を分別して保管できるようになってとても管理しやすくなったと喜ぶ校長先生。

活動の写真



完成した「作業場」



作業場の内部。窓には鉄格子、ドアには鍵が整備され、布を安全かつ衛生的に管理できるようになった。



製品を分別して保管できるようになってとても管理しやすくなったと喜ぶ校長先生。



自主的にぶら下げられた「手拭きタオル」
村で初めて見ました！！



石鹸が置かれたトイレ内



字が読めないお母さん達の為にイラストで
清掃や衛生の大切さを伝えました



外にあるのが普通ですが、家の中でも綺麗に
使えて便利な事を実践したいと思います



新たに雇用した2名の貧困層の「母親」が
ミシンの練習を行っている様子。



布の裁断等の研修の様子。一人は畑を持たない未亡人の女性。子どもを学校へ行
かせられるようになったと喜びます。



縫い物作業に集まった村のお母さん達。ロータリークラブ寄贈のソーラを使って扇風機の下で、作業が行われています。



村の中での作業なので我が子を手元において仕事ができると喜んで
います。



みんな以前に比べて身ぎれいに明る
くなりました。

日本への招聘の様子



日本では幼稚園、保育園、小学～高校等を訪問し視察研修を重ねました。



Mother 活動を取り入れて、支援して下さっている園や学校を訪問しました。(啓明学園にて)



Mother 製品が日本に戻ってからどのような経緯を経て販売されるかを体験中 (ASAP 事務所にて)



作業場完成後、現地に委託したい作業の研修の様子。指導するのは日本のボランティアのお母さん達。



3か月滞在し日本語の勉強に励んだ先生が、帰国後子どもたちや先生に日本語の授業をしている様子